

MAGAはトランプを超えるか



松井 聡

トランプ米大統領と支持基盤である「MAGA（米国を再び偉大に）」「マガ」派の一部との関係で亀裂が目立っている。背景の一つが、トランプ氏が外交を重視し過ぎており、「国内政策に集中すべきだ」「共和党のマジョリー・テイラー・グリーン連邦下院議員」との批判だ。MAGAはどこに向かうのか。

「トランプ氏はMAGAの中で非常に重要な人物だ。ただし、トランプ氏はフランケンシュタインを作った博士だと言えるかもしれない。自身の『創造物』を完全には制御し切れないということだ」。米外交に詳しい米アメリカン・カンパニーのギャレット・マーティン上級講師はこうした見方を示し、「『MAGA』『トランプ』という構図ではなくなっている」と語る。

トランプ氏は1月の第2次政権発足以降、「八つの戦争」を解決したと主張するなど紛争の仲介に注力し、ロシアとウクライナの戦争終結にも取り組む。頻繁にホワイトハウスに外国首脳を招いて会談するほか、アジアなどへの外遊も繰り返してきた。

MAGAはそもそも一枚岩ではなく、さまざまな勢力の「連合」や「寄り合い所帯」と指摘されてきた。トランプ氏の支持者には、グリーン氏のような国内重視派から宗教保守、さらには技術革新を重視し、規制緩和を訴えるテクノロジー業界の起業家ら「テック右派」などが「同居」する。国内重視派からはイスラエルへの支援やイランの核施設への攻撃のほか、最近では高度専門職向けの就労ビザ「H1Bビザ」を巡ってもトランプ氏への批判が高まる。マーティン氏は「MAGA派内の構造的な対立は常に存在してきた。それが表面化している」と話す。

今後、MAGAはどこに向かうのか。「トランプ氏が国内、とりわけ経済で問題を抱え、支持率が上向かないならば、MAGA内の亀裂は深まる。ただし、中間選挙までは限定的だろう。議員ではない『外野』は自由に批判できるが、多くの議員はトランプ氏の動員力を必要としているからだ」と見る。

仮に2026年11月の中間選挙で与党・共和党が連邦下院の支配を失うなどした場合、トランプ氏の影響力は弱まり、MAGAの亀裂がさらに進む可能性も否定できない。MAGAの今後にとっても、中間選挙は大きな意味を持ちそうだ。